

夏休みに日本文学科の能楽入門集中講座がありました。私は台湾からの留学生で、お能のことは何も知らないのです。しかし、指導教員である日置俊次教授が能楽師の方々と二年間にわたる入念な準備をしてくださり、講座の企画をしてくださいました。それで思い切って参加してみたのです。何日間も続けて、能楽堂でお謡いを習ったり、お仕舞いを習ったり、おもて（能面）をかけてみたり、重い絹の装束を着てみたり、そして能「黒塚」の舞台公演を鑑賞したり、本当に濃密な時間を過ごすことができました。台風で電車が止まった日も、みんなずぶぬれになりながら参加していました。一瞬一瞬が発見の連続でした。心が震えました。その喜びを、二十首の短歌の連作にまとめてみました。

能楽入門講座

待ちに待った日置先生の能講座学生たちの顔が輝く

知らなかった文化の滔々たる流れおもての鬨りにすこし怖くなる

「妖怪ウオッチ」は能の世界という先生 地縛霊といふ伝統を知る

台風の大雨の中濡れそぼち学生はだれも文句を言わず

しんとして学生たちが耳澄ます装束の金と赤の輝き

扇とは神を「をぐ」もの儀礼にも武器にもなると知る驚きは

「黒塚」の糸巻きまわる運命の糸にわたしもしばられている

角とがる般若の面に秘められた悲しみに気づく鬼とはわたしだ

にっぽんの文学と舞と音楽がひとつになって私を誘う

これからもきくとわたしはついていく能の世界の深い流れに

能楽堂の光る床板さまさまな面がならび叫んで笑う

ここはどこいまはいつだかわからない能面はただ暗くほほえむ

女子学生たちが面をかける一瞬に誰だかまるでわからなくなる

同じ服を着たままなのにその影はこの世のものとはもう思えない

異次元の世界が召喚されたのかぼろっと面が舞台に浮かぶ

能面は裏から見れば穴のあるただの木切れに過ぎないと知る

かけてみて見えないままに立ち上がる苦しい自分の息が聞こえる

さらさらと光る装束を羽織る肩あまりに重くてよろけてしまう

日置先生が狸々の面をかけている赤ら顔が妙に似合って見える

先生は面をかけても先生のままけれども秘密をのぞいた気がする

講評

日本文化の奥深いところについて学べた喜びや感動が、ひしひしと伝わってくる作品である。表現する手段として短歌を連作している点も、大変すばらしい。日本語も大変流暢であり、留学生の作品とは思えない。